

2026 [令和 8] 年 2 月 14 日 (土)、目白大学・目白大学短期大学部にて第 52 回関東・東北ブロック研究会が開催されました。学会奨励賞受賞報告のほか、4 件の研究発表・報告についても、活発な質疑が交わされ、充実した研究会となりました。

ご挨拶

「変化の時代におけるビジネス実務教育の使命」

第 52 回関東・東北ブロック研究会

実行委員長 町田由徳



本日はご多用の中、日本ビジネス実務学会第 52 回関東・東北ブロック研究会にご参加いただき、誠にありがとうございます。開会にあたり一言ご挨拶申し上げます。

国際情勢や日本の経済状況がますます不確実性を帯びる昨今、ビジネス実務のあり方も大きな転換期を迎えております。こうした時代にあって、教育現場と実務の現場をつなぐ本学会の役割は、ますます重要になっていると感じております。

本日の研究会では、多様な視点からの研究報告、実践事例の共有が予定されております。本学会の特色である「現場に根ざした知」と「理論的探究」との往還が、ここに集う皆様の議論によって一層深まることを期待しております。

また、本大会の開催にあたり、ご準備・ご協力をい

ただきました関係各位に心より感謝申し上げます。

本日が、参加者の皆様にとって実り多い学びと交流の場となりますことを祈念いたしまして、開会のご挨拶とさせていただきます。

学会奨励賞受賞報告

老舗企業と連携した PBL - 10 年間にわたる短期大学におけるキャリア教育 -

澤田裕美 (跡見学園女子大学)

[研究対象領域] 【1】 ビジネス実務教育 3) 教育方法の研究



第 4 次産業革命の渦中にある現在、経済産業省が 2006 年に「社会人基礎力」(3 つの能力と 1 2 の能力要素) を提唱するなど人づくりを担う教育の変革が求められている。女子短期大学において、キャリア構築支援を目標に「社会人基礎力」の指標を活用し、2016 年度から正課授業(前期)に加え、正課外(後期)として履修生有志における老舗企業との PBL を実践し、学生たちのキャリア構築について試みた。2015 年～2016 年度の 2 年間の成果については、第 35 回全国大会にて発表した。更に、2019 年度以降は 6 年間に

わたり正課授業（後期）を開講し、キャリア教育の指導法について研究を継続した。コロナ禍前後の取り組みを含め、直近 10 年間にわたる老舗企業 8 社との PBL の研究成果を 4 点の質問項目でクラスター分析を行い、共通項目を抽出し、全国大会に続いて報告した。質問項目は以下、①高校時代の自己評価②短大時代の PBL 経験に関する評価③就職活動において重視したこと④現在の自己評価の 4 点である。

実践事例報告

未活用森林資源を活用した PBL 型商品開発の実践事例報告

中路真紀（文京学院大学）

【研究対象領域】【1】ビジネス実務教育 3) 教育方法の研究



本研究は、未活用森林資源を活用した PBL (Project Based Learning) 型商品開発の実践事例を報告するものである。文京学院大学経営学部では、大学理念「自立と共生」を具現化する教育手法として、デザイン思考を基盤とした長期フィールドワーク型 PBL を実施している。本事例では、盛岡市における樹皮などの未活用資源と担い手不足という地域課題に着目し、自治体および地域職人と連携した商品開発プロジェクトを実施した。学生は材料調達から企画、試作、展示販売までの一連のプロセスに参画し、調査とヒアリングを通じて課題を定義し、デザイン思考のプロセスである発想・試作・検証を反復することで、ランプ、リース等くるみの木の皮を用いた商品を開発した。さらに、盛岡市でのテスト販売と来場者調査を通じて、市場性

および社会的受容性を検証した。本研究は、地域資源の価値化と人材育成を統合的に実現する教育実践モデルとしての有効性を示唆するものである。

MIE (Magazine in Education) によるビジネス実務能力育成 — 初年次・3 年次ゼミにおける学修プロセスを中心に —

牛山佳菜代（目白大学）

【研究対象領域】【1】ビジネス実務教育 3) 教育方法の研究



本報告は、雑誌利活用教育を指す MIE (Magazine in Education) の実践を通じて、ビジネス実務能力育成への寄与を検討するものである。取り上げた事例は、3 年次ゼミにおいて半年間で学生自身が企画・取材・編集・発行までを担い、雑誌を完成させるプロジェクトである。学修プロセスの分析およびアンケート結果から、アポ取りや取材経験が敬語運用、要点整理、相手視点の獲得に結びつき、さらにチームにおけるプロジェクトの遂行を通じて報告・連絡・相談、役割分担、締切意識といった組織人としての基礎的な行動様式の理解を促すことが示唆された。加えて、対面取材は傾聴力や言語化能力を高め、就職活動における面接対応力の向上にも寄与している。以上から、MIE は専門教育にとどまらず汎用的能力育成の枠組みとしての展開可能性を有すると結論づけた。

研究発表

社会人講話はどのように自分ごと化されるのか— 大学低学年における行動量と行動意図—

松井広美 (目白大学)

[研究対象領域]【1】ビジネス実務教育 3) 教育方法の研究



本研究は、大学低学年を対象とした社会人講話が、どのように内在化され、自分ごと化を経て行動意図の形成に至るのかを明らかにすることを目的とした。講話以前の学生生活における取り組みの広がりや示す行動量（活動領域数）に着目し、その違いが講話の意味づけや行動意図の明確さにどのように関係するかを検討した。大学1・2年生303名の自由記述を対象にテキストマイニング分析を行った結果、講話の意味づけのあり方には行動量に応じた質的差異が認められた。行動量が高い学生は講話内容を自己の文脈に引き寄せ、省察を通して具体的な行動意図を形成する傾向がみられた。一方、行動量が低い学生は肯定的に受容しつつも一般的理解にとどまる傾向がみられた。以上より、自分ごと化の過程は学生の事前行動量の違いに応じて、その意味づけや行動意図形成の様相が異なることが示唆された。

.....

企業からの自由記述データに基づく長期インターンシップ評価構造の分析 — 学生評価・制度評価・自由意見の統合的検討 —

町田由徳 (ものつくり大学)

[研究対象領域]【1】ビジネス実務教育 3) 教育方法の研究



本発表では、本学長期インターンシップにおける企業側自由記述評価 (n=128) を対象に、テキストマイニングによる評価構造の定量的解明を試みたものである。自由記述を文単位に分割し、「規律・態度」「業務遂行力」「主体性」「コミュニケーション」「学習行動」「専門スキル」「協働性」の7評価軸に分類するとともに、各評価文脈をポジティブ/ネガティブに判定することで、出現頻度（コメント単位）と評価極性（文単位）を分離して分析した。

その結果、主体性およびコミュニケーションは出現頻度・肯定的評価率の双方で高い値を示し、企業評価の中核が行動特性にあることが示唆された。一方、学習行動および協働性は相対的に否定的文脈で言及される割合が高く、育成課題としての側面が確認された。さらに分野別比較では、専門スキルにおいて建設系で有意に高い肯定的評価が認められた。本研究は、自由記述データに対して出現頻度と評価極性を統合した分析枠組みを適用することで、インターンシップ評価の構造的特徴を統計的に明らかにした点に方法論的意義を有する。

関東・東北ブロック総会

2024年度（2024年5月1日～2025年4月30日）の収支報告と活動報告、2025年度（2025年5月1日～2026年4月30日）の活動計画と予算案について説明があり承認されました。2025年度は、例年通り、ブロック研究会の開催とブロック会報の発行を

行います。

2024 年度収支計算書

(2024 年 5 月 1 日～2025 年 4 月 30 日) 単位：円

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	199,482	ブロック研究会	89,562
ブロック補助金	128,000	講師謝金	20,000
1)		交通費	3,172
雑収入	5,000	会場費	55,550
利息	216	消耗品費	400
研究会収入	44,000	Peatix 費用	10,440
		振込手数料	214
		本部返戻金	0
		次年度繰越金	286,922
合計	376,698	合計	376,698

1) 1,200 円×65 名 + 50,000 円

2025 年度収支予算書

(2025 年 5 月 1 日～2026 年 4 月 30 日) 単位：円

収入の部		支出の部	
摘要	金額	摘要	金額
前年度繰越金	286,922	ブロック研究会	67,000
ブロック補助金	137,600	講師謝金	0
1)		交通費	0
		会場費	60,000
		Peatix 費用	7,000
		消耗品費	1,000
		振込手数料	0
研究会収入	20,000	本部返戻金	0
利息	600	次年度繰越金	378,122
合計	445,122	合計	445,122

1) 1,200 円×73 名 + 50,000 円

研究会を終えて

昨年度に引き続き、会場を提供いただいた目白大学・目白大学短期大学部の先生方に改めて感謝いたします。

現在、研究報告や論集への投稿の減少という課題があります。それを踏まえ、研究報告を増やすべく、基調講演やパネル・ディスカッションは企画しませんでした。2025 年の全国大会で学会奨励賞を受賞した報告を加えて、結果として、計 5 件の報告となり、目標とした数には達しませんでした。今後も研究報告の数や時間を増やすために取り組んでいきたいと思えます。研究発表・報告の内容については、いずれも活発な質疑が交わされ、充実した研究会となりました。昨年に引き続き懇親会も開催し、会員間の交流を深め、楽しい時間を過ごすことができました。

また、関東・東北ブロックでの全国大会の開催を控えていたことから、運営委員を変更せず続けてきましたが、全国大会を終えたので、運営委員を大幅に変更しました。これまでご担当いただいた先生方には改めて感謝いたします。とはいえ、再度、運営委員を担当いただくこともあると思いますので、その際はよろしくをお願いします。新たに運営委員をご担当いただく先生方も引き続きよろしくお願いします。

2025 年度運営委員

- リーダー： 坪井明彦 (高崎経済大学)
- サブリーダー： 上岡史郎 (目白大学短期大学部)
- 牛山佳菜代 (目白大学)
- 後藤和也 (山形県立米沢女子短期大学)
- 津木裕子 (産業能率大学)
- 堀良平 (聖和学園短期大学)
- 町田由徳 (ものづくり大学)
- 松井広美 (目白大学)
- 和田早代 (目白大学短期大学部)

事務局連絡先

〒370-0801 群馬県高崎市上並榎町 1300 番地 高崎経済大学 坪井研究室
E-mail : tsuboaki@tcue.ac.jp

2026 年 3 月発行